

清水寺は平安朝初期の征夷大將軍であった坂上田村麻呂アテルイが建てたものです。絶景の舞台の足下に或る顕彰碑があり、それには「北天の雄 阿弋流為・母禮モレ之碑」と刻まれています。阿弋流為は母禮と共に今の東北地方〔岩手県水沢市が拠点〕で勢力を誇った、エミシ（蝦夷）の首領です。大和朝廷を震撼させた徹底抗戦の末、延暦21年（802）に田村麻呂率いる朝廷軍に投降し、河内国杜山〔現・大阪府枚方市〕にて斬首されました。ちょうど1200年前です。

## 桃太郎伝説

ところで、有名な「桃太郎伝説」がこの阿弋流為とも関連がありそうなので、少し紹介します。

桃から生まれた桃太郎は、大きくなった時に鬼退治に出掛けます。腰には黍団子が入った袋を結わえています。途中でイヌ・キジ・サルが家来となり、お伴をすることになりました。鬼が島に辿り着き、家来と力を合わせて鬼を退治し、宝物をいっぱい持ち帰ります。

この伝説は昔話の形式をとってはおりますが、実は、大和朝廷が全国を平定していく過程を表したものと云われています。とりわけエミシとの抗争が重要なモチーフのようですが、要点を整理しますと、下表のような意味合いとなります。

桃	昔から邪気を祓う霊力があるとされた。
黍団子	一粒で十人力を発揮する源泉であり、朝廷の威光や武力を示す。または、服従の代わりに与えた官職などの褒美を示す。
動物の家来	途中で服従した抵抗勢力。動物名は軽蔑を意味する。
鬼	朝廷にも服従しようとはしない、屈強な抵抗勢力。異様な存在。「化外の民」、「まつろわぬ民」と呼ばれた。
宝物	金（砂金）、鉄などの鉱産物および馬。

※「化外」とは朝廷の王化に染まらないこと、「まつろわぬ」とは服従しないこと。

朝廷側から見た「まつろわぬ民」は日本各地に存在しました。『日本書紀』、『出雲国風土記』、『延喜式』などの記録の中では、熊襲・国栖・土蜘蛛・八束脛・高志人・蝦夷などの名が出てきます。これらの民はいわば先住民であり、縄文人の末裔だろうと考えられています。

## 縄文人の末裔VS渡来人

縄文時代というのは、今を遡る13,000年前から10,000年以上も続いた、人類史上最長の文明時代と推定されています。（かのエジプト文明でも最大限見積もっても7,000年止まりですよ）

縄文人は自然と調和した狩猟採集生活が基本です。キノコが3本あれば、1本は神のために、1本は動物のために残し、残る1本だけ食に回すような生き方です。日本民俗学の柳田国男が著わした「山の民」と同様です。穀物栽培（アワ、ヒエ、イネ、ソバ）も僅かながら営んだらしく、そのことは遺跡から出た人骨のカラーゲン抽出によって確認できるとのことです。

縄文人の社会は階級分化や土地の私有の無い、なだらかな共同体であったと考えられます。その末裔のエミシは小さな集落毎にまとまり、さらに血縁関係からなる氏族連合や部族連合を形成しました。先述の阿弋流為は胆沢地域の、片や母禮は北上川を挟んで隣り合う黒石地域の首領でありました。後年、二人は朝廷軍に対するため軍事同盟を結ぶ間柄となります。

一方朝廷側では、自分たちとは異なるエミシの生活圏を「<sup>ヒタカミノクニ</sup>日高見国」と呼んでおりました。畿内から見て日が高く昇る東国の地、という意味でしょう。今の岩手県から宮城県にかけての北上川流域と比定されますが、**ヒタカミ（日高見）＝きたかみ（北上）**なのでしょうか。

大和朝廷を構成する人々は、主に朝鮮半島からの渡来人(亡命人)だろうと云われています。**秦氏が秦の始皇帝の末裔**と名乗るように、出自を遡ると実は地球規模の広がりとなるのです。というのも、下記の変遷のように、国家の版図拡大や分裂・滅亡などの過程を経て、人々は融合・同化したり、避難したりして、大陸の東端にある日本列島に辿り着いたらしいのです。渡来人は、財力・技術力・政治体制など進んだレベルのものを持ち込んだようです。

余談ながら、聖なる都市イエルサレムは、ヘブライ語のイエル(都市)+サレム(シャローム:平和)が語源で、シャロームはソロモン王と同義語です。日本の平安京という名称とか、菊の紋章とユダヤ宮殿の象徴印が似てるとか、不思議な共通性に注目した**日本・ユダヤ同祖論**などもあるのですよ。

イスラエル王国 → スキタイ民族 → 中央アジア → 秦王朝 → 新羅・百済 →  
 [ユダヤ] [小アジア～カスピ海沿岸] [西域～中国] [朝鮮半島]  
 …⇒ 日本へ(大和朝廷樹立?)

また、畿内での勢力争いに破れた勢力(出雲氏・物部氏・新羅勢力など)が東国や北日本へ避難しているようで、朝廷の東国進出には、こういう勢力を掃討する目的も当然含まれていました。

### 東大寺大仏の鑄造

・・・天平 19 年（747）着工（聖武天皇）

大和朝廷が東北経営（実態は蚕食・侵攻）を始めたのは、**大化の改新**（645 年）以降です。陸奥国を設けては出先の拠点（**多賀城**、伊<sup>コレハル</sup>治城など）を築き、朝廷への貢納を強制したり、服従した民を奴隷としたり、あるいは他地域(例えば武蔵国)への強制移住を図っていました。

朝廷が陸奥への関心を強めるきっかけは、天平 21 年（749）に**黄金が産出した**ことです。蘇我氏が物部氏を打倒し仏教を教化の柱に据えてからというもの、寺院の建立および仏像の製作に拍車がかかりました。聖武天皇の肝いりで始まった**東大寺大仏の鑄造**には相当量の金（ある計算によると、**表面積が 527 m<sup>2</sup>ゆえに金箔で 60kg 相当!**）を必要としていたようです。当時国内の金産出は微々たるものでしたから、朝廷はやむなく海の向こうの唐から高額の金を調達する腹積もりでした。そういう矢先に金産出の朗報、朝廷の喜びようは尋常ではなかったのです。これぞ仏の賜物、宝の出現に感謝するという意味でしょうか、時の孝謙天皇は元号を天平から「**天平感宝**」と改めました。黄金を献上した**百<sup>クダラノコキシウジケイフク</sup>済王氏敬福**は格別の昇進です。

### 阿弼流為 VS 大和朝廷 (坂上田村麻呂)

朝廷とエミシとの間に抜き差しならぬ緊張関係が生じたのは、朝廷による「分断統治」作戦の開始でした。即ち、隷属したエミシ(=<sup>フシユウ</sup>俘囚)を使って、服従しない他のエミシの監視とか時には戦闘行為のようなことを始めたのです。「**夷をもって夷を制す**」と呼ばれる、古今東西で異民族の制圧に用いられる、極めて古典的ながら効果的な手法です。そして最終的な決定打が、時の**桓武天皇**が「野蠻で卑しい族を討て」と蔑んだ勅命を出したことです。

エミシにとって、共同体の身内から攻められることもさることながら、自分たちを卑しいと見なした朝廷に対し、誇りを傷つけられたという怒りが蔓延したわけです。

それでは、阿弋流為が登場するあたりから朝廷とエミシとの抗戦状況を追ってみましょう。

年	天皇	戦闘名など	状況
天平 21 (749) 天平感宝 1	孝謙	—————	陸奥守百濟王氏敬福が黄金献上 元号を改める
天平感宝 4 (752)	孝謙	—————	東大寺の大仏が開眼する
宝亀 5 (774)	光仁	モモオ 桃生城襲撃	海道エミシが襲撃
宝亀 7 (776)	光仁	朝廷軍と戦闘	志波エミシが朝廷軍を破る
宝亀 11 (780)	光仁	伊治城襲撃	アザマロ 伊治エミシの磐麻呂が反乱を起こす 多賀城も炎上
延暦 8 (789) 6月3日	桓武	スプセ 巢伏の戦	胆沢エミシの阿弋流為が朝廷軍を大破 朝廷軍の戦死 25 名、溺死 1,257 名
延暦 13 (794)	桓武	朝廷軍 10 万	田村麻呂と阿弋流為、双方に被害甚大
延暦 16 (797)	桓武		田村麻呂が胆沢・閉伊エミシを討つ
延暦 20 (801)	桓武	朝廷軍 4 万	田村麻呂・阿弋流為が 3 度目の抗戦
延暦 21 (802)	桓武	胆沢城造築	阿弋流為・母禮が降伏し、京に向かう 阿弋流為・母禮が河内国で斬首される
延暦 24 (805)	桓武	—————	蝦夷征伐と平安京造営が中止される

桃生城襲撃から阿弋流為らの降伏に至るまで、30 年近くにも及ぶ闘いであったわけですね。朝廷軍は、巢伏の戦で少数のエミシ連合軍の陽動作戦に翻弄されてしまいますが、最終的には兵力の圧倒的な差（約 50 倍～100 倍）でもって押し切った結果となりました。征夷を果した田村麻呂は大昇進を続け、最終的には大納言の地位に上り詰めます。

ところで、朝廷がここまで執念を燃やした理由には、下記の事項が挙げられると思います。

- ① 多くの亡命貴族たちを抱えるには、都以外に新たな土地と奴隷を必要とした。
- ② 武器・農具・工具の生産に必要な鉄の産地を必要とした。
- ③ 権力や富の象徴としての黄金を独占したかった。
- ④ 戦闘用・農耕用の馬を必要とした。
- ⑤ 陸奥へ退却した敵対勢力（出雲氏・物部氏・新羅勢力）の掃討が必要だった。

とはいえ、長年の闘いは朝廷を財政的にも疲弊させましたので、莫大な財貨を必要とする軍事と造作を中止するに至りました。藤原緒嗣<sup>オツグ</sup>〔中止を主張〕と菅野真道<sup>マミチ</sup>〔継続を主張〕が徳政論争を行い、前者の意見が採用されたという有名な話があります。

阿弋流為がどのような人物であったかは定かではなく、英雄と崇められた田村麻呂伝説ではむしろ醜悪な抵抗勢力（悪路王、赤頭という蔑称あり）として描かれて来ましたが、近年では、阿弋流為・田村麻呂の双方ともに見直されていますが、清水寺にある顕彰碑は仲直りの願いを込めた、せめてもの供養の証であります。